

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	海事科学部
-----	------------	----------	-------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅲ 教育方法

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名： 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

○顕著な変化のあった観点名： 主体的な学習を促す取組

☆ 平成 20 年度以降の顕著な変化のあった取組

◆授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(1) キャリアパス教育

産業現場で活躍する実務者を講師として招へいする寄附講義（「海事産業社会事情」、「海運企業のトップマネジメントへの途」、「海事科学のキャリアパス」及び「最新船用機器・技術概論」）を開設した。

(2) 英語の能力向上

- ・ 夏季休業中の 3 日間集中講義形式で TOEIC 講習会実施後に能力向上の尺度とするために TOEIC を受験させた。また、TOEIC スコアを博士前期課程入学試験科目「英語」の得点として採用した。さらに、学生海外研修派遣学生の選考要件に TOEIC スコアの導入を行った。これらの施策により実用英語能力の向上を図った。
- ・ 学部 3・4 年生を対象に専門知識を英語で理解し、議論する機会等を提供するために、カリフォルニア海事大学の「海事セキュリティ管理と実用英語に関する特別研修」に 6 名の学生を派遣した。
- ・ 民間外国語学校が英語サテライト教室を開講できる環境をキャンパス内に整備し、レベルに応じた 3 コースに対して 70 人が受講した。

◆主体的な学習を促す取組

(1) 履修フローチャートの作成

学部学生の履修申請をより円滑及び系統立てて行えるように、共通教育分野における主要な開設科目を含む学科別の開設科目間の相互関係を可視化した履修フローチャートを作成し、学生に提示した。これにより学生の将来を見据えた勉学体制の確立を以前に増して支援することができた。また、シラバスとリンクさせ、従来と比較して解説科目に対する情報提供をより一層充実させた。

(2) 教授会における啓発

教授会において、教育改善及び学部学生指導の充実を構成員に繰り返し依頼した。また、FD 委員会での検討結果を全員に周知させ、授業に反映するよう依頼した。

☆ 成果の状況とその理由

神戸大学全学共通授業評価アンケート調査（16 項目）の中で、海事科学部における平成 19 年度、平成 20 年度及び 21 年度の学生の授業評価結果のうち「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」「主体的な学習を促す取組」に関する 9 項目、即ち（1）受講態度（積極性）（2）シラバス明快性（3）到達目標は明確か（4）成績評価基準は明確か（5）教員の熱意はあったか（6）授業の進度は適切か（7）授業の理解度（8）授業で関心が増したか（9）総合評価結果の平成 19 年度から 21 年度にかけての平均値（肯定的な意見（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」）の百分率を示している。）は 57% → 64% → 66% と 9 ポイント増加している（各項目の数値は、分析項目Ⅳ参照）。なお、否定的な意見（「そうは思わない」と「どちらかといえばそうは思わない」）は、19%から 15%と 4 ポイント減少した。

このように、平成 20 年度以降の顕著な変化のあった取組であるキャリアパス教育、英語の能力向上、履修フローチャートの作成及び教授会における啓発を通じて、教職員一丸となった努力の継続により、教育方法を顕著に改善した。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	海事科学部
-----	------------	----------	-------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅳ 学業の成果

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名：学業の成果に関する学生の評価

☆ 平成 19 年度以降の教育方法等の改善があった取組

- (1) ピアレビュー： 15 人の教員がピアレビューを受け、評価結果を公表する等のプロセスを経て、授業方法の改善に努めた。
- (2) FD シンポジウム： FD シンポジウムを開催し、教育効果改善に関する諸問題について議論した。また、学部外の学識者を招へいし有益な提言を受け、それらの反映に努めた。
- (3) 教授会における啓発： 教授会において暫定評価結果を報告するとともに、教育成果改善及び学生指導の充実を構成員に依頼した。
- (4) 教育実績のポイント制導入： 研究科内追加予算は、教育、研究及び管理運営等への貢献度をポイント制により評価して重点配分を行っていたが、平成 20 年度より教育に関する評価のウエイトを相対的に増加させた。

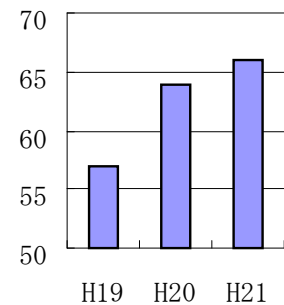
このように、平成 19 年度までの暫定評価結果を受けて、学生の授業評価アンケートや企業へのアンケートを引き続き実施するほか、上記の4項目を中心に、教育方法等の改善のための努力を継続的に行った。

☆ 授業評価における顕著な変化とその理由

神戸大学全学共通授業評価アンケート調査(16 項目)が毎学期行われている。海事科学部における平成 19 年度、平成 20 年度及び 21 年度の学生の授業評価結果のうち「学業の成果」に関する 11 項目の評価結果の経年変化は以下のとおりである。

数値は、肯定的な意見(「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」)の百分率の変化を示している。

	19 年後期	→	20 年後期	→	21 年前期
(1) 受講態度(積極性)	56%	→	63%	→	66%
(2) シラバス明快性	49%	→	58%	→	65%
(3) 到達目標は明確か	54%	→	62%	→	65%
(4) 成績評価基準は明確か	59%	→	69%	→	72%
(5) 教員の熱意はあったか	65%	→	72%	→	73%
(6) 質問の対応は適切か	63%	→	66%	→	69%
(7) 話し方は明瞭か	58%	→	64%	→	66%
(8) 授業の進度は適切か	57%	→	64%	→	67%
(9) 授業の理解度	51%	→	59%	→	57%
(10) 授業で関心が増したか	56%	→	64%	→	58%
(11) 総合評価	63%	→	68%	→	69%



図は全項目の平均値(単位は%)を示しており、平成 19 年度から 21 年度にかけて、57% → 64% → 66% と 9 ポイント増加している。

一方、否定的な意見(「そうは思わない」と「どちらかといえばそうは思わない」)は、19%から 15%と 4 ポイント減少している。

以上の結果、従来から行ってきた取組に加えて、ピアレビュー、FD シンポジウム、教授会における啓発及び教育実績のポイント制導入に関する教職員一丸となった努力の継続により、学業の成果に顕著な改善が見られたと判断した。